



大学院専門職学位課程学修成果報告書

平成25年 12月 10日

学校教育研究科長 殿

大学院専門職学位課程  
教育実践高度化専攻  
学籍番号 245664J  
氏 名 吉井 彰宏

1 修得した科目と学びの概要

臨床共通科目：教職に求められる高度に専門的な力量の基礎となる学識と教養及び技能を体系的に身につけるための科目

科 目	単位	学 び の 概 要
教育課程の編成・実施の実践と課題	4	算数科の授業について学習した。亜教授学的学習状況をつくり出すことが、子どもの主体的な学びを成立させる
教科等の実践的な指導方法の実践と課題	4	主に個に応じた指導について学習した。『学び合い』やWBT教材を通した、個に応じた指導の効果について追究した。
生徒指導, 教育相談の実践と課題	4	道徳から生徒指導・教育相談にアプローチした。他教科との関連を図った道徳の在り方について追究した。
学級経営, 学校経営の実践と課題	4	職員会議について学習した。職員会議の進め方や課題等, イメージつかむことができた。また職員位会議の法令についても触れることができた。
学校教育と教員の在り方に関する事例研究	4	教員の年齢構成に偏りが見られる今日, 共通の目標を目指し, お互いに学び合う大切さを学んだ。

臨床共通科目全体を通じた学びの概要

臨床共通科目では学校教育の実践について研鑽を深めることができた。具体的には講義の内容, グループワークでの現職院生との関わりから教育現場の実態を知ることができた。これは学卒院生の私にとって新鮮なものだった。学部時は講義中心の授業が多く, 教育現場の実態を口頭で説明されても全くイメージがつかなかった。しかし教職大学院には現職院生や実務家教員が多数在籍する。この関わりから教育現場の実態について具体的なイメージをふくらませることができた。

また, 知識の他に, 同僚と協働することの大切さを学んだ。私は学卒院生であり, 異年齢の人と何か一つのことを追究することははじめての経験だった。故に戸惑いも多く, 自分がどのようにしてチームに貢献していけば良いのかがわからなかった。しかし, 現職院生の動きを見ているうちに自分が貢献できる部分を発見することができた。現職院生には及ばないが, 自分の役割を把握できたことは大きな学びだったと感じている。これから様々な経験を積みつつ, 自分の役割をレベルアップさせるような努力をしていきたい。

プロフェッショナル科目：深い学識と教養をもとにして学校現場における実践を意味づけ、的確に判断する力量を身につけるための科目

科 目	単位	学 び の 概 要
学び合い授業論	2	『学び合い』の理論と実践について学ぶことができた。子どもは関わり合えば自力で課題を解決できることがわかった。
学習デザイン論	2	「目標と学習と評価の一体化」について学ぶことができた。子どもと教師が目標を共有し、その評価を1時間内の授業で返すことが大切である。
国語科授業のデザインと評価	2	「読みの交流」について学ぶことができた。子どもが当てはまる文を自由に想像することによって国語力を育むことができる。
子どもを引きつける授業づくり	2	小学校社会科の授業について実践的な学習ができた。模擬授業を通して子どもの考えを活かしながら進める授業を追究した。

#### 学校支援プロジェクト関連科目

：長期にわたって臨床場に入り込んで一定の課題を持った活動を行い、その課題への取組を通して、そこで生じている現象を記録・分析しつつ、問題の核心をついた対処の方向性を示す訓練を行うための科目

：教育現場の状況を的確に把握し、他の人々と協働しながら適切に対応する力量を、学校現場における実践を通して身につけるための科目

科 目	単位
学校支援フィールドワークⅠ（ストレート）	3
学校支援フィールドワークⅠ（特別）	2
（教育実践）リフレクションⅠ	4
（教育実践）プレゼンテーションⅠ	1
学校支援プロジェクトを通じた学びの概要（1年次）	
1年目は小学校現場に入ったこともなかったのが、当初、児童観がつかめず戸惑う毎日だった。また、現職院生とチームを組んだことにより、社会人として良識のある行動を身に付けることができた。	
連携協力校の教員の授業分析を担った。「目標と学習と評価の一体化」に基づき、児童主体の学習を成立させるために、授業を質的・量的に分析し、その結果をフィードバックした。質的分析では教師の発話のプロトコルをおこし、どのような声かけが児童に効果があったかを分析した。量的分析では先行研究をもとに教師の発話をカテゴリー分けし、どのような発話が多いかをカウントした。このような分析方法を用い	

た結果、1回目の分析ではどの教師も教師主導で授業を進める時間が多かった。しかし、2回目の分析ではどの教師も児童の活動時間が多めにとり、子ども主体の授業を成立させることができていた。また、発話も授業の課題を児童自身に自力解決させるような発話が増えた。この成果は現場の教員をはじめとする様々な方から評価を得ることができた。

個人研究では、社会科の授業で「目標と学習と評価の一体化」を目指して授業を行った。また、授業力向上のために、現職院生と協働して授業計画を立案し、授業後に振り返りを行った。それを分析した結果、はじめは教科書や黒板を見ていることが多く子どもにも正対していなかった。しかし、授業時数を重ねるにつれて子どもにも正対して授業を行うことができるようになっていた。また、指示に関する発話にも改善がみられた。最初のほうは後付け、抽象的な指示が多く、子どもたちに戸惑いがみられた。しかし、授業時数を重ねるにつれて、後付け、抽象的な指示が減り、子どもたちは円滑に学習活動に取り組めるようになった。これは授業時間の短縮にもつながり、様々な面で改善が見られるようになった。

現職院生と協働研究では、同時通話が可能なトランシーバーで現職院生と自分の発話を共有することで、自分の指導に関する発話にどのような変容が見られるかを検証した。当初は抽象的な指導が多かったが、授業時数を重ねるにつれて具体的な指導ができるようになっていった。これは自分が現職院生の発話をトランシーバーを介して聞くことで、参考にしたことが具体的な発話の増加につながったと考えられる。このように現職院生と協働して研究を行うことによって現職院生の指導技術に驚かされた。

科	目	単位
学校支援フィールドワークⅡ	(ストレート)	3
学校支援フィールドワークⅡ	(特別)	2
(教育実践)	リフレクションⅡ	4
(教育実践)	プレゼンテーションⅡ	1
学校支援プロジェクトを通じた学びの概要(2年次)		
1年目の支援成果から、2年目も同一の学校、チームで学校支援に臨むことができた。初等教育実習で一ヶ月遅れての参加だったが、昨年と同様に成果をあげることができた。		
今年度も昨年度に引き続き、連携協力校の研究課題に従い、授業分析やリフレクションを行った。なお、研究課題は昨年度と変更はなく、円滑に進めることができた。しかし、今年度は昨年度の分析をより良いものしようとする点から、以下の変更を加えた。		
①分析結果を授業実施日のうちにフィードバックすること		
授業者に分析結果を授業実施日にフィードバックすることによって、記憶の新しいうちに振り返りができ、効果の向上を促した。iPadアプリであるLessonNoteを使用し、児童の様子やノートなどを時系列に記録することで詳細な評価を行った。その評価を授業者とすり合わせることで、目標と学習と評価が一体化しているかを確認することができた。		
②抽出児を定めること		
学習課題にかかわる抽出児童の行動と発話内容の変容をフィードバックすることで、学習課題や学習活動、評価が適切であったか分析し、フィードバックを行った。		
また、後学のために算数の授業を6時間担当させて頂いた。現職院生に参観、アドバイスを頂くことで、授業の手法や心構えを身に付けることができた。今回のアドバイスにおいて、特に意識したことは以下の2点である。		
①教材解釈の不足		

教材研究が不足していたことから、多様な考えを収束しまとめることがあまりできなかった。また、子どもの間違いを指摘し、それをもとに授業を進めることができなかった。教材研究はどの教科でも大変重要なものである。今後怠ることはせずに十分な準備をして授業に臨む。

## ②臨機応変な対応

予定していた通りに授業を進めようとしすぎて、不測の事態が起きたときの対応が不十分であった。指導案は計画である。指導案通りに進まなくてもその場で切り替えしのできる能力を経験によって身に付けていきたい。

## 2 専門職学位課程における学び全体の振り返り

学部ストレートで入学し、今まで自分が過ごしてきた時間と大きな違いが生じ戸惑いを感じるが多々あった。しかし、今日では教職大学院で経験した全ての事柄が今後教員として現場に立つためには役に立つと確信している。以下、具体的に学びの振り返りを記す。

### ① 社会で重要になる礼儀・作法

支援当初は社会人としての礼儀・作法が全くわからず、しばしばご指導を頂いた。はじめのうちはその意味がよくわからないまま行動にうつしていたが、今日では大変重要なことであると感じている。

学校現場では様々な年齢の人と協働して仕事を行わなければならない。礼儀・作法は、人間関係を円滑にし、協働力を発揮する基礎基本だと考えることができた。社会に出る前にこのような基本的な事柄をご指導頂いたことには大変感謝している。学校現場ではご指導頂いたことを行動にうつし、職員の同僚性を高めるような付き合い方をしていきたい。

### ② 授業の手法・心構え

入学以後、自分の授業に対する考え方が大きく変わった。入学以前は自分が経験してきたように、授業とは教師が説明して子どもがその説明をもとに問題演習や実技を繰り返すといった一斉指導のスタイルが一般的なものだと考えていた。また、そこでは授業についていけない子どもが少なからずいるとしても仕方がないと考えていた。

しかし、入学以後「目標と学習と評価の一体化」を学んだことで子どもが主体の授業展開の大切さを知り、一人も見捨てない授業手法を理解した。授業を教師主導で進める時間が短く、子どもの自力解決に焦点を当てた授業は自分の授業観を大きく変えるものであった。この学びは学校生活の8割を占める授業の時間に活かせることから、大きな学びであったと確信している。

### ③ 校内研修

連携協力校の校内研修に参加させて頂いた。現職院生と協働して連携協力校の教員の授業を分析しフィードバックすることで直接的に校内研修に関わることができた。支援を通して校内研修は職員のチームワークが大切であるということを学んだ。連携協力校では年齢等に関係なく、お互いの授業を積極的に協議し、高め合おうとする意識が感じられた。また、自分のような経験のない者の意見も積極的に聞いて頂いた。

このように発言をしやすい環境を作り出すことは協議が活性化すると確信した。そのためには日頃から同僚とコミュニケーションを積極的にとり、同僚性を高めていくことが大切であると考えている。

教職大学院では様々な人との関わりを通して、良い経験をさせて頂いた。大学院入学以前は同年齢の集団との付き合いが中心だったため、異年齢の集団との付き合いは大変勉強になった。今後は異年齢集団と協働して仕事をするようになるので、教職大学院で学んだ協働力を生かし、積極的に同僚とコミュニケーションをとりながら学校運営の一端を円滑に担えるような努力をしていきたい。